



JACET通信

大学英語教育学会

December 2000 The Japan Association of College English Teachers

No.125

【第39回全国大会特集号】

大会をふりかえって

大会委員長 名本幹雄

20世紀最後の大学英語教育学会第39回全国大会が沖縄の地、沖縄国際大学ではじめて開催された。大会テーマは「東アジアと21世紀の英語教育」である。本大会は基調講演3、小講演12、全体シンポジウム1、シンポジウム13、私の授業3、研究発表82、実践報告29、事例研究13、賛助会員発表4、ワークショップ5、ポスターセッション4、計169件で、参加者は約1500名で過去30周年間の大会で最大規模の大会であった。このような盛大な大会を成功裡に終了できたことにたいして、大会運営委員、実行委員、学生の皆さん、特に沖縄国際大学ならびに沖縄の先生方に心からお礼を申し上げます。

沖縄は古来、東南アジア、東アジア諸国との交流の拠点として独特な文化を形成した。また第二次世界大戦では戦争の惨禍を経験した土地である。更に現在も米軍基地が存在し戦争と平和の意味を真剣に問いかけてくる。21世紀の日本の未来はアジア諸国との友好、共生のなかに求めなければならない。その意味で、このような歴史を持ちアジア諸国にもっとも近い日本最南端の沖縄で、本大会が上記のテーマで開催された意義は極めて大きい。

全体シンポジウム「東アジアと21世紀の英語教育」には、台湾から施玉惠氏、韓国からは権五良氏、RELCのWilly Renandya氏、日本からは小池会長が参加し、東南アジア諸国、台湾、韓国における英語教育の変遷、現況、問題点が報告され、今後これらの国々が一致協力して、英語教育改善のために努力するという「JACET Plenary Symposium COMMUNIQUE Okinawa 2000」が発

基調講演 アジアにおける沖縄と言語

名本幹雄 沖縄国際大学 英語学部長



表された。これは東アジア諸国が協力して、これらの地域の21世紀の英語教育改善のために力強い第一歩を踏み出したことを意味する歴史的な出来事と言える。

基調講演では韓国李孝雄氏、台湾の施玉惠氏の両氏が両国の小学校英語教育に関する講演を行った。小学校の英語教育導入を目前に控える日本にとって多くの示唆が得られたものと思われる。

シンポジウム、小講演、研究発表にも少子化、大学教育の大衆化を反映する問題提起がなされ、今後の本学会が国際化と共にチャレンジしなければならない深刻な一面を窺わせた。

大会の在り方については次のような意見が聞かれた。

小講演が多く、研究発表やシンポジウムと重なりベテランの先生方のすばらしい話が聞けなかったこと。発表後の質問は複数の人が手を挙げている場合は1人1項目にすべきであること。申し込み時点で申請していた機器以外は使用を認めないこと。Power Pointやコンピューターのプロジェクターを使用する場合は、WindowsかMacを申し込み時に明記すること。

＝大会報告＝

大会運営委員長 岡秀夫

今年度の大会は、はじめて海をわたり、沖縄で開催されました。その大会テーマも、開催地と20世紀最後の大会にふさわしく、「東アジアと21世紀の英語教育」でした。そのテーマにそって基調講演（「アジアにおける沖縄の歴史と言語」など）と全体シンポジウム（“English Education in East Asia for the 21st Century”）が生まれ、それに相応しい方々を内外からお招きできました。発表件数も例年を大幅にこえ、基調講演3件、私の授業3件、研究発表82件、実践報告29件、事例研究13件、シンポジウム13件、ワークショップ5件、賛助会員発表4件、小講演12件、ポスターセッション4件、全体シンポジウム1件で、合計169件（ちなみに2年前の岡山大会は110件）となり、会員の方々の関心の高さを示していました。

最後になりましたが、九州・沖縄支部の執行委員の先生方のご努力とご苦労にたいして、心からお礼申し上げます。とくに木下実行委員長と平良先生のもと、若い先生方が団結して生き生きと活躍していらっしゃる姿はとても印象的でした。お昼のエイサーの踊りや基地ビューイングは、沖縄のサービス精神の表れで、大会を盛り上げ、参加者の沖縄滞在を思い出深きものにしてくれました。来年また、北海道でお会いできることを楽しみにしております。

For the first time in its history, the JACET Convention was held across the seas in Okinawa. The theme was also appropriate for the occasion, time- and place-wise: “English Education in East Asia for the 21st Century”.

In accordance with this Convention theme were the Plenary Speeches (“Okinawa and Language in Asia” etc.) and the Plenary Symposium (“English Education in East Asia for the 21st Century”), by inviting distinguished speakers, both domestic and overseas.

The number of presentations skyrocketed to 169 in total, compared to 110 in the last Convention in Okayama in 1998: 3 Keynote Addresses, 3 Welcome to My Classroom Presentations, 82 Papers, 29 Reports on Classroom Activities, 13 Case Studies, 13 Symposia, 5 Workshops, 4 Publisher’s Presentations, 12 Mini-lectures, 4 Posters, 1 Plenary Symposium.

Before closing, I’d like to thank the steering committee of the Kyushu-Okinawa Chapter for all their efforts and

devotion to make this Convention such a great success. It was impressive to see young members working so cooperatively with Profs. Kinoshita and Taira at the center. The Eisa Dance and the Base Viewing, planned during the lunch break, were manifestations of the local hospitality.

Cherishing sweet memories of Okinawa,
OKA, Hideo. Convention Chair

◆会場校として◆

沖縄国際大学 玉城康雄

大学英語教育学会第39回全国大会を終えて、早や半月が過ぎようとしています。ここ南の島にも季節は確実に訪れ、いま沖縄は穏やかな日差しを浴びて尾花が満開というところですよ。

さて、これまでの大会を振り返ると都市部の大きな大学で開催されており、果たして南海の小さな大学で全国規模のそれが可能なのか不安でした。

しかし、県内4大学から選出された先生方が20回におよぶ実行委員会をもち、綿密に計画をたて、それぞれの役割を見事に担ってくれました。さらに、教職を目指す多くの学生たちの昼夜いとわぬ働き協力があったればこそその本大会の成功でした。

大会当日には「アジアにおける沖縄と言語」という演題で沖縄学の権威・外間守善先生による基調講演が行われ、その深い学識と温厚な人柄に多くの聴衆が感銘を受けました。特に、沖縄で生まれ育った私達に大いなる誇りを与え、本土からの皆さんにはこれまで以上に沖縄を解するヨスガになったかと思えます。

今焦点になっている普天間基地が本学には隣接しており、屋上より見下ろしながら沖縄基地の実態と平和教育の大切さについて学ぶ機会が持てたことは特筆すべきことです。のべ500名の参加がありました。

また、大会の合間をぬって、エイサーや空手など沖縄の伝統芸能・古武術を本県三大学の学生に披露してもらいました。大会に彩りを添えてもらうと同時に、本土の先生方には何よりの歓迎となりました。

大会本部および九州支部の先生方をはじめ本大会に関わってくださった数多くの方々のお陰で、微力ながら今世紀最後の大会を沖縄の地で無事終えることができました。心より感謝いたします。

理事会・評議員会・総会報告

代表幹事 小林 ひろみ

2000年度の全国大会時に開催された全国理事会、評議員会及び総会等について報告致します。

A. 全国理事会

日時：2000年11月2日（木）14:00～15:50

会場：メルパルクオキナワ

議長：小池 生夫会長

【議案】

1. 1999年度活動報告及び会計決算概要に関する件
2. 2000年度活動計画及び会計予算概要に関する件
3. 役員（顧問・理事・評議員等）選任に関する件
4. 2000年度JACET賞に関する件
5. 全国大会開催日程に関する件
6. 総会の開催に関する件
7. 特別補助費に関する件
8. 支部費の配分に関する件
9. 国際交流に関する件
10. その他

B. 評議員会

日時：2000年11月2日（木）17:00～17:50

会場：メルパルクオキナワ

議長：米山朝二 副議長：門田幹夫

【議案】

1. 1999年度活動報告及び会計決算概要に関する件
2. 2000年度活動計画及び会計予算概要に関する件
3. 役員（顧問・理事・評議員等）選任に関する件
4. 2000年度JACET賞に関する件
5. その他

C. 総会

日時：2000年11月3日（金）9:40～10:40

会場：沖縄国際大学7号館

議長：玉城康雄 副議長：池内正直

【議案】

1. 1999年度活動報告及び会計決算概要に関する件
2. 2000年度活動計画及び会計予算概要に関する件
3. 役員（顧問・理事・評議員等）選任に関する件
4. その他

D. 役員異動

(顧問) (退任) 片山嘉雄 (2000年3月)
佐藤一夫 (2000年3月)

(新任) 福田昇八

(理事)

本部 (新任) 神保尚武

中部 (退任) 菅原光穂 津田早苗

(新任) 山中秀三 吉川寛

(評議員)

本部 (退任) 村田勇三郎 中山隆吉

LOBO, Felix 牧雅夫

(新任) 楠瀬淳三 富山真知子
鳥飼玖美子 田近裕子

鈴木英一 竹蓋幸生 本名信行
池内正直 阿知波真知子

北海道支部 (退任) 阿部晃夫 船津好平
牧野高吉 西堀ゆり

(新任) 新井良夫 金谷茂
森永正治 高井収

東北支部 (退任) 横田勉 久松豊
(新任) 千々岩佳史

中部支部 (退任) 堀内俊和 山中秀三 吉川寛
(新任) 菅原光穂 津田早苗

関西支部 (退任) 枝澤康代 日比野日出雄
小林宏之 三浦常司 沢村文雄

(新任) 長谷川存古 橋内武
SELL, David 内田聖二

(支部長)

北海道支部 (退任) 浪田克之介 (新任) 栗原豪彦

東北支部 (退任) 畑中孝實 (新任) 高梨庸雄

中部 (退任) 菅原光穂 (新任) 山中秀三

(幹事)

本部 (代表退任) 神保尚武

(代表新任) 小林ひろみ

(副代表退任) 小林ひろみ

(副代表再任) 岡秀夫

(副代表新任) 中野美知子

(退任) 浅羽亮一 古谷千里

BERENDT, Erich A.

(新任) 高本裕迅 森戸由久 田部滋
矢野安剛

北海道支部 (退任) 森永正治 (新任) 西堀ゆり

中部支部 (退任) 原田邦彦 (退任) 下内充

(新任) 倉橋洋子

関西支部 (新任) 梅咲敦子

(研究企画委員)

本部 (退任) BERENDT, Erich A. 神保尚武
田中慎也

北海道支部 (退任) 樋口隆士 森永正治 佐藤行敏
(新任) 要 春光 大場浩正 佐々木勝志
渡辺一郎

東北支部 (退任) 加藤和男 遠藤裕一 吉田孝
横田勉 森山盛吉 久松豊

(新任) 羽井佐昭彦 杉山恵 高橋潔
宇都宮満

中部支部 (新任) 村田泰美

関西支部 (退任) 石田秀雄 鎌田修 清水裕子

(新任) 藤沢良行 高橋寿夫 山本雅代
武

中国・四国支部 (退任) 橋内 武

九州・沖縄支部（退任）米田紘一
（新任）森茂 金森強 FOUUSER, Robert

なお、これまでに退任された以下の理事に感謝状が贈られた。

- 北海道支部 : 岩城禮三、岡野哲、船津好平、金谷茂
- 東北支部 : 藤田孝、西村嘉太郎
- 中部支部 : 丹下省吾、田中春美、小野経男、津田早苗、菅原光穂
- 関西支部 : 大浦幸男、安藤昭一、小田幸信
- 中国四国支部 : 片山嘉雄、中村浩路
- 九州沖縄支部 : 宮原文夫、福田昇八

E. JACET 賞受賞者

1. 学術賞：水野光晴（神奈川大学）『中間言語分析－英語冠詞習得の軌跡』（開拓社，2000年2月）の1件。本年度は新人賞と実践賞の受賞者はいなかった。
2. 特別賞：学校法人加藤学園（学園長：加藤正秀氏）、同学園暁秀初等学校で1992年以来実践されているイマージョン方式による英語教育の成果が評価されたもの。なお、この特別賞は平川唯一氏に授与されたのが第1回で、今回が2回目である。

F. 学会報告

1. 1999年度活動概要
 - (1) JACET 通信No.118 - 122の発行
 - (2) 紀要No.30, No.31の発行
 - (3) 全国大会の開催（早稲田大学8月1日 - 6日 AILA '99 Tokyo「21世紀における言語の役割 求心性と多様性」、出席者2300名）
 - (4) セミナー等の開催（FDセミナー：東洋大学12月23日「大学の英語教育と海外研修－現状と展望」参加者44名、春期英語教育セミナー：立教大学3月28日「コミュニケーション能力の開発」参加者40名）
 - (5) 海外学術交流団体との交流派遣：4月RELCへ国吉丈夫理事および丹下省吾評議員（中部支部）、IATEFLへ松林世志子会員、6月のKATE大会へ奥津文夫理事、井門義男理事、2月のKATEへ名本幹雄理事、木下正義理事をそれぞれ派

遣した。

- (6) 本日月例研究・講演会の開催（204 - 209回）（年7回）
- (7) 研究会活動の助成：研究会へ研究会補助費882,895円、特別補助費11件700,000円、合計1,582,895円
- (8) 会員名簿の発行
- (9) JACET案内（英文版）の発行
2. 2000年度活動計画概要
 - (1) JACET 通信No.123 - 127の発行
 - (2) 紀要No.32, No.33の発行
 - (3) 全国大会の開催（第39回11月3 - 5日、沖縄国際大学、「東アジアにおける英語教育」）
 - (4) セミナー等の開催（FDセミナー：12月、春期英語教育セミナー：3月）
 - (5) 海外学術交流団体との交流派遣：4月RELCへ田辺洋二副会長および豊田昌倫関西支部支部長、IATEFLへ村田久美子研究企画委員、6月KATEへ岡秀夫副代表幹事、上野之江北海道支部研究企画委員、さらに2月のKATEへ役員派遣
 - (6) 本日月例研究・講演会（213-219回）の開催
 - (7) 研究会活動の助成：研究会へ研究会補助費1,000,000円、特別補助費9件590,000円
 - (8) 会員名簿の発行 11月末発送の予定
 - (9) 支部大会の開催
 - 北海道支部 6月17日（土）
北海道大学高等教育機能開発総合センター
 - 東北支部 6月10日（土）
東北学院大学土樋キャンパス
 - 中部支部大会 6月10日（土）静岡大学教育学部
 - 関西支部 6月10日（土）仏教大学
 - 中国・四国支部 6月4日（土）四国大学
 - 九州・沖縄支部 11月 沖縄全国大会と合併開催
- (10) 来年度以降の全国大会開催予定地
 - 2001年度 北海道支部（9/14 16 藤女子大学）
 - 2002年度 本部
 - 2003年度 東北支部
3. 会員数（2000年10月末現在） 2828

<第1日 11月3日（金）>

【基調講演】

アジアにおける沖縄の歴史と言語

講師 外間守善
（沖縄研究所所長、法政大学名誉教授）

I 沖縄の歴史

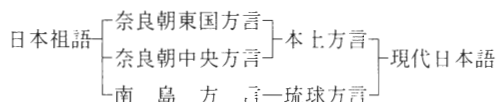
- 1 アジアの王朝史と琉球王朝史
- 2 琉球王朝の交易立国と海外貿易の発展
 - クノッソス王朝（クレタ島）と琉球王朝（沖縄

島）の交易立国

- 舟楫を以て万国の津梁となす（万国津梁之鐘）
- 交易の精神…向かう方撓て・撓て・和やけて・風やけれ
- 明との交易・南方との交易・日本との交易・朝鮮との交易

II 沖縄の文化

1 沖縄の言語



2 染織・陶芸・漆芸の歴史

- 3 文化複合的個性 (Culture Complex) …北・西・南からの文化の受容
受容→変容…創造…明るさ・優しさ・おおらかさ
チャンプルー文化…ナシ・チャンプル (Nasi Campur)

Ⅲ 安らぎとしあわせを求めて

- 1 世界に広がる原郷信仰と洞窟
2 ベートーヴェンの交響曲「第九」と沖縄…苦悩に耐えて、耐えて、歓喜へ…

Ⅳ 沖縄のこころ (平和思想)

- 1 日本国憲法 (平和憲法)
1946年 (昭和21年) 11月3日公布…1947年 (昭和22) 5月3日施行
第9条の精神…戦争の放棄、軍備及び交戦権の否認
2 対日講和条約 (サンフランシスコ条約)
1951年 (昭和26) 9月8日締結…1952年 (昭和27) 4月28日発効
同条約第3条で、沖縄と日本は行政分離 (潜在主権)
3 日米安全保障条約
1960年 (昭和35) 1月19日署名…6月23日発効
日本国とアメリカ合衆国との間の相互協力及び安全保障条約
4 日米地位協定
1960年 (昭和35) 11月19日調印…6月23日発効 - 両国議会承認
正式には「日本国とアメリカ合衆国との間の相互協力及び安全保障条約第6条に基づく施設及び区域並びに日本国における合衆国軍隊の地位に関する協定」

【シンポジウム】

1-1 ESP教育の日本の現状を考える

司会・提案者 笹島 茂 (埼玉医科大)
提案者 柴山森二郎 (駿河台大)、
山内ひさ子 (久留米工大)

日本におけるESP (English for Specific Purposes) 教育が、実際に大学等の専門英語教育において、どの程度浸透しているのかという実態はあまり把握されていない。そこで、いくつかの分野においてESP教育の実態調査を行なった。調査は次の3点を基本にして実施された。

- (1) 共通のアンケート項目による意識調査
(2) 各学部で配布されるシラバスの分析
(3) ESP教材 (市販大学教科書等) の分析
その調査をもとに、各分野の実状にあわせて、各分野の実態が報告された。日本のESP事情に詳しい柴山は、(1)による各分野の教員と学生を対象とした意識調査の結果をもとに、改めてESP理論に基づいた教育の必要性和専門教員と語学教員の連携の必要性を強く訴えた。山内は、工学系の大学の英語教育においてはESP科目の積極的な導入の必要性を提言した。理由として、ESP科目は

学習意欲を高め、学生の英語学力差にかかわらず、レベルに応じて展開が可能であるとした。

さらに、笹島は医学分野、堀内正子 (昭和健康大) は薬学分野、磯崎京子 (淑徳短大) は食物栄養分野、山崎敦子 (日本工業大) は理学分野、加地朱 (奈良工業高専) は高等専門学校というように各分野の英語教育の実態が報告された。その他、寺内一 (高千穂商科大) と鳥飼慎一郎 (立教大) から法律、齊藤早苗 (立教大) から福祉、渡辺容子 (群馬県立医療短大) から看護の調査データが提供された。本シンポジウムの調査はESP研究会 (本部) の報告書としてまとめられる。

(文責: 笹島茂・埼玉医科大)

1-2 外国語習得・学習の個人差 — Aptitude, Attitude/Motivation, Strategies —

司会・提案者 八島智子 (関西大)
提案者 竹内 理 (関西大)
吉澤清美 (関西大)

本研究発表では、第二言語能力の個人差要因として「言語学習適性」、「態度・動機」、および「学習方略」について、日本人大学生を対象に個人要因と英語力の関係性を調査した結果を報告した。

吉澤は、まず、Carroll & Sapon, (1959) や Pimsleur, (1966) を基に開発された「日本人用外国語適性テスト (Sasaki, 1991, 1993)」の解説を行った。次に、外国語適性と大学入学以前の外国語学習経験が、初習の外国語学習に及ぼす影響を判別分析、共分散構造分析を用いて調べた結果を報告し「日本人用外国語適性テスト」の予測的妥当性を検証した。最後に外国語適性の教育への応用の可能性についての考察があった。

八島は、Gardner (1985) 社会教育モデルを日本に適用する際の問題点を論じ、日本における英語学習への態度を概念的、操作的に定義する必要があることを述べた。次に、国際的な事象、職業に対する志向性や、異文化接触傾向などを統合したコンセプトとして、「国際的志向性」を想定した。さらに、予備調査に基づき、潜在変数、「国際的志向性」「学習意欲」「英語力」を、複数の観測変数で定義した上で、共分散構造分析を用い変数間の関係性を推定した。

竹内は従来、量的手法で学習方略についての研究を進めてきたが、今回は日本のEFL環境にふさわしい学習方略を抽出するため、日記法、回想法、インタビュー法などの質的手法による研究を行った。発表では、研究手法について詳述した上、日本人外国語学習成功者が6種類の方略群を多用し、その方略群の使用時期にも共通点があること、方略が教授可能なものであることなどを示し、日本人の英語学習の成功につながる方略解明への道筋を示した。

(文責: 八島智子・関西大)

1-3 大学英語教育の危機!?

〈実態調査委員会企画〉

司会・提案者 伊部 哲 (専修大)
提案者 西堀ゆり (北海道大)
山中秀二 (名古屋女子大)
原田園子 (神戸女学院大)

1991年の大学設置基準の大綱化にともなって大学外国語教育は自由に設定できるようになった。しかし、結果はいろいろな意味で弱体化をもたらした。そこで、JACETは実態調査委員会を本年2月に発足させ、前回の科研費による1982年から1990年にわたる実態調査後の変化の実態を把握すべく、大規模な調査をはじめている。本シンポジウムはこれにつながるもので、各地域の実態を報告し、大会に間に合った全国調査の一部を利用し、問題点を明らかにし、対策を探るのが目的であった。

前もって笹島茂 (埼玉医大) 氏が各支部幹事を通じて得た支部の状況をハンドアウトにしてくださっていた。

西堀は、北海道の調査結果から、現状を「引き潮現象」と把握し、少子化と不況がらみの国立志向増大などによる私立大学の受験生減、入試の多様化、“落とす”入試から“入れる”入試への変化、など受験生の減少を中心に問題提起をした。提案として、「地方」の特色を生かすこと、「地方」の連携の可能性、教員の(再)研修などをあげた。

山中は、現時点の英語教育の問題として、機器の活用、「一般英語」教育の責任体制、学力多様化にともなうプレイスメント・テスト、成果に対する点検・評価、社会からの厳しい批判に対応する必要性、をあげた。そして、もっとも訴えたいこととして、外国語教育の基本理念の活用、クラス編成、到達目標の設定、をあげた。

原田は、総じて受験生が減っているが、英語関係の学部・学科では、国立大で増えた大学が半数ほどあり、私立は増えた大学もあるが全体に減ったこと、英語関係学部・学科の改組・廃止と定員減が見られること、などを指摘した。また、英語教育危機の理由として、学生の学力と意欲の低下、英語教育の目的や大学内での位置付け、英文・英語科への志望者減、などの点を指摘し、英語により諸外国と交渉する能力を養成する必要を主張した。

伊部は、新しい調査結果の一部として、設置基準の改定前後で外国語教育を変えていない大学が33%あるし、英語必修単位数、英語を選択する学生数、技能別授業、習熟度別授業、通年・半期授業設定、などの諸点で大学間に2極化が見られることを指摘した。そして、「支えを失った英語教育? :自立を目指して」として、国際化=英語、進学競争、受験英語、設置基準、英語に対する国民的あこがれ、など11の“支え”を指摘し、自立し、成果の見える英語教育の必要を訴えた。

(文責:伊部哲・専修大)

1-4 English Language Education and Applied Discourse Analysis in Cyber Learning

Organizer: NAKANO, Michiko (Waseda University)
Discussants: BERENDT, Eric A. (Seisen Women's University) and YANO, Yasutaka (Waseda University)
Presenters: NAKANO, Michiko, OWADA, Kazuharu, OHYA, Masanori, TSUTSUI, Eiichiro (Waseda University)

This symposiums consisted of three parts: (1) Progress Reports on Cyber Learning at Waseda; (2) Some Methods of Analyzing Computer Mediated Communication (CMC) Data; and (3) Similarities and Differences between Face-to-Face Dialogue and Computer Mediated Communication. In the first presentation, by showing the demonstration video, we reported our progress in terms of the computer systems used, the modes of student participation, the pedagogical use of home page, the increasing number of participant universities, cyber seminars and cyber lectures in 2000. Then, we demonstrated what kinds of written discourse data and oral discourse data can be obtained. In the second presentation, we proposed some methods of analysis for computer mediated communication data. In 1999 we started collecting Chat data among Korean Learners of English, Phillipino Learners of English and Japanese, Japanese Learners of English and British Learners of Japanese. We demonstrated some tentative methods of analysis which can high-lighten the differences of topics, the level of language proficiency and to some extent the differences of cultural presupposition. In the third presentation, we compared CMC data with those of face-to-face dialog data. Computer mediated communication is often called “chatting,” due to some features common to CMC and our face-to-face interactive conversation. In spite of some superficial similarities, the methods of turn-taking, overlapping and butting are different from those of face-to-face dialogues. We also looked at what kind of conversation fillers are used in computer-mediated communication. After these three presentations, we discussed merits and demerits of cyber learning in English Language Education.

(Summarized by NAKANO, Michiko, Waseda University)

1-5 世界の言語政策から日本が学ぶもの

司会 田中 慎也 (桜美林大)
提案者 三好 重仁 (東京電機大)
岡戸 浩子 (名古屋大)
長谷川瑞穂 (東洋学園大)
中尾 正史 (桐朋学園大短大部)
河原 俊昭 (金沢経済大)

まず、国際比較の観点から「カナダにおける多文化主義と遺産言語教育」(長谷川)、「フィリピンの言語政策」(河原)、「EUの言語政策」(中尾)、「オセアニアの言語政策」(岡戸)の概要をそれぞれ報告した後、今回本研究회가纏めた小冊子『日本の地方自治体における言語サービスの研究』の報告を三好が行なった。

次に、田中が日本のかかえる言語問題とその政策課題について提示した後フロアーとの質疑応答に入った。

フロアーとの応答で問題となった点は、日本における外国語教育のあり方として、多言語主義 <English plus> でいくべきか英語 <English only> だけを中心とした外国語教育で行くべきかという点に絞ってディスカッションが行われた。大勢は多言語主義賛成であったが、世界の言語政策、特に英語圏諸国における近年の共生の論理と多文化主義を中核に捉えた言語政策を考える時、この論点は、今後の日本の英語教育政策を考える上で非常に重要なものであると考えられる。

今回の企画は、今後の英語教育改革に値する言語政策・言語教育政策の調査・研究を深める上で大変有意義なものであった。(文責：田中慎也・桜美林大)

1-6 意味論・語用論から見た「コミュニケーションカビリティ」

<中部支部誤文研究会企画>

司会・提案者 丹下 省吾 (名古屋外国語大)
提案者 榎本 喜夫 (名古屋短大)
原田 邦彦 (名古屋外国語大)
稲葉みどり (愛知教育大)

学習者が書く英文がどんな種類の誤りを含んでいるか、その英文が英米在住の英語ネイティブスピーカーにどの程度理解されるか、理解されないとすればその要因は何か。「コミュニケーションカビリティ」(伝達度)という尺度を設けて上の課題を追求してきたこの研究会は、支部大会および全国大会での提案を経て昨年 AILA の世界大会で結論を発表し、報告書を刊行した。

抽出したすべての誤りは意味論的、論理的、語用論的、文法的の4種に分類したが、総数1,354の誤りの大半が文法に属するものであったにもかかわらず、文意の理解を著しく妨げるものは約300に限定され、うち意味論・語用論的誤りがその2/3に達した。この結果から、この2つの範疇の誤りを取り上げ分析考察して、今回のシンポジウムで報告・提案することとした。

司会者の経緯説明の後、榎本氏が「コミュニケーションカビリティに影響を及ぼす諸要因」として、分析の基準に設定した用語の定義と理論的根拠を説明し、次いで原田氏が「コミュニケーションカビリティを下げる致命的要因」として、著しく伝達度を損なう誤りの種類を数量的に示した。

焦点の一つ「意味論からの分析」は石橋千鶴子氏(愛知淑徳大)によるものであるが、大会に参加できなかったため原田氏が代行した。最も頻繁な誤りは語彙選択に関するもの(lendとborrowの混同など)、次いで日本語

の語彙や構文の直訳など(祭が「盛り上がる」festivals riseほか)が目立ち、文法より語彙・表現の増強、また、状況説明の不足への注意が必要だと指摘した。

「語用論からの分析」は稲葉氏が担当した。致命的誤用をさらに6つの観点から分析し、指示表現の不明瞭や曖昧さ、談話の一貫性の欠如、書き手と読み手の間の共有知識の不一致などが理解を妨げる、誤りがあっても十分な文脈や読み手への意識があれば伝達は成功する、これらを考慮した指導が望まれる、と結んだ。

ディスカッションの中では、提案のような視点を学習者にどう理解させるか、実際の授業をどんな形で進めるか、誤りをどの程度まで訂正するか、などについて質問や実状報告、意見の表明があった。

(文責：丹下省吾・名古屋外国語大)

1-7 第二言語メンタルレキシコン：日本人英語学習者の語彙能力および語彙アクセスをめぐって

司会：門田修平 (関西学院大)
発表者：中西義子 (大阪国際女子短大)
野呂忠司 (相愛大)
横川博一 (京都外国語大)
門田修平 (関西学院大)

本シンポジウムでは、日本人英語学習者のメンタルレキシコン(Mental Lexicon)内の語彙項目の広さ・深さ、レキシコンのネットワーク構造、語の意味情報へのアクセスにおける音韻の関与という4つの観点から、これまでの理論的・実証的研究の成果を報告し、議論した。

(1)日本人英語学習者の語彙サイズ：日本人学習者が、大学入学時にどの程度の語彙知識を有しているかに関して、親近性の判断調査および母語での意味再生調査の結果もとづいて、彼らの語彙習得サイズの概数を推測し、未習得語のリストを作成しようとする試みについて報告した。

(2)語彙項目の知識の深さ：単語知識の深さの違いが学習者の認知処理に影響を与えることは大いに予想されることである。本報告では、テストされる語彙項目の系列的知識と連辞的知識を測定する単語テストとして、Readの方法を使い測定した語知識の深さと語彙サイズテストとの関係、読みおける理解との関係について検討した。

(3)語彙項目間のネットワーク形成：語の系列的知識と連辞的知識などの語彙項目間にどのようなネットワークが形成されているかについて、語の自由連想課題の結果を分析することにより検証しようとしたもので、その結果、母語のレキシコン内の語彙ネットワークと外国語としての英語のネットワークの間には、かなりの類似性が認められることが明らかになった。

(4)メンタルレキシコンへのアクセス：日本人大学生に、英単語(同音異義語)に対し音韻的・意味的連想を課した研究や、英単語2語のペアの意味・音韻的判断テスト

などにおいて、同時に与えた構音抑制や同音異義語ペアの影響を査定した研究など、これまでの筆者による成果をまとめて報告し、語の意味情報へのアクセスにおける音韻情報の役割について総合的に議論した。

(文責：門田修平・関西学院大)

1-8 ESPとは何か

司会・提案者 寺内 一 (高千穂商科大)
提案者 齊藤早苗 (立教大)
渡邊容子 (群馬県立医療短大)
横山彰三 (運輸省航空大学校)

ESPの定義を、「学問的背景や職業などの固有のニーズを持つことにより区別され同質性が認められ、その専門領域において職業上の目的を達成するために形成される集団である『ディスコースコミュニティ』の内外において、明確かつ具体的な目的をもって英語を使用するために行なわれる言語研究、およびその言語教育」であるとした(寺内)。

齊藤は、EAP (English for Academic Purposes) の発展の歴史を (I) レジスター分析 (1960年代：草創期)、(II) Rhetoric and Discourse Analysis (1970年代)、(III) Analysis of Study Skills (1970年代後半 - 1980年代前半)、(IV) Analysis of Learning Needs (1970年代後半 - 1980年代初頭：統合期) の4つの時期に区分し、また、EOP (English for Occupational Purposes) の歴史を、(I) 1960年代初頭 - 1970年代、(II) 1970年代 - 1980年代、(III) 1980年代半ばから1990年代まで、さらに (IV) 2000年以降の状況に区分して説明した。

渡邊(代読)はジャンル分析の重要性、つまり、テキストがあるディスコースコミュニティ全体において果たす社会言語学的な役割を考察することの重要性を指摘した。横山は実際の日本のESP教育の実状を解説した。特にESPが日本の大学英語教育に根付かなかった理由を検証するとともに、勤務する航空大学校でESPが必要とされて導入した経緯を述べた。さらに、ESPの生命線ともいえるニーズ分析の必要性を自身の経験を通して述べた。

(文責：寺内一・高千穂商科大)

1-9 日本語話者に適当な英語発音

司会 五十嵐康男 (成城大)
提案者 國吉 丈夫 (千葉経済大)
田辺 洋二 (早稲田大)
湯澤 伸夫 (高崎経済大)

日本において、多様な英語のどれをモデルとしたら良いのかを探るのが、本シンポジウムの狙いである。

國吉、田辺両氏とも、ネイティブ・スピーカーの英語をモデルにするべきである、とする。イギリス、アメリカ、オーストラリアなどの英語でもよいが、生活語と

して使っている人々と切り離れたものはいけない。

学校では、基本的な文法構造と関連づけて、音韻システム、リズム、音調をおおまかに習得することを目標にし、その先に支障のないコミュニケーションができる段階に近づくようにするのがよい。

國吉氏はイギリス英語、田辺氏はアメリカ英語と、モデルにするものが異なるが、生活・文化と結びついていない英語をモデルにすると、中途半端な理解しにくいことばを習得する可能性が高い、という。

どの英語にせよ、意味を区別する単位としての母音に体系をもつこと、また / p, t, k, s, f, n, l, tr / などの子音の単語における音連続が大事である、とする。英語のリズムと関係しているこの点は見逃せない。以上のポイントをおさえた、インテリジビリティのある通じる英語であればよい。

湯澤氏は、機器を使って、ネイティブ・スピーカーと日本人話者の接点、つまりどの程度までが日本的な発音の限度か、第一フォルマント、第二フォルマント、第三フォルマントの現れ方で判断する方法を紹介した。今後の発音モデル設定に期待を持たせる研究であった。

結局、モデルはどの英語でもよいからネイティブ・スピーカーのものを、体系をもった母音と、音連続における子音に注意し、理解しやすいリズムと音調を身につけるようにするということになる。

(文責：五十嵐康男・成城大)

【小講演】

1-1 「学者のもの知らず」

司会 田辺洋二 (早稲田大)
講演 牧 雅夫 (元早稲田大)

旧制四高時代 W. Hazlitt の *On the Ignorance of the Learned* と出会う。講演はその痛烈な学者批判の一節から始まる。

If we wish to know the force of human genius we should read Shakespeare. If we wish to see the insignificance of human learning we may study his commentators. 氏は文中の force 「迫力」と insignificance of human learning 「知識のくだらなさ」に言及、knowledge 「真の知識」の重みを説く。knowledge は「知識以上のもの」であり、さらに F. Bacon の “Knowledge itself is power.” で power を取り上げ、force 「武力」に倒れた Jesus Christ も power で復活することの意味の重要性を述べた。また、F. de Saussure の “Language is not nomenclature.” 「言語は命名論に非ず」で言語の力を論じた。学者批判の論旨から、東大の学生時代に教えを受けた R. H. Blyth 氏の “Read books, but don't read books about books about books.” を紹介し、禅や俳句の美を英語で全世界で紹介した Blyth 氏の再評価を強く促した。

Hazlitt の学者批判の真実性を検証するために、氏は英文法の対照強調 (contrastive emphasis) に問題を絞り、

感情強調 (emotive emphasis) との相違から Hazzlit の knowledge の真意に迫る。対照強調の「～ではないとは言えない。いや～だ」の含意を説き、そこから語法研究の重要さに論を進めた。氏の knowledge 論は長年の Basic English の研究に基づく辞書論へと展開し、A. S. Hornby の偉大なる功績へと導かれ、文学と語学を結ぶ語の power 論となった。

(講演者補遺)

講演の後、私の Basic English について質問があった。当日配布のハンダウト 3-A...3-E の部分が回答になろう。英語の基本文の様態を、全部 Basic で意味→形態に展開してある。各文の true は = in agreement to the fact と解されよ。Basic の効用の一例である。

(文責：田辺洋二・早稲田大)

1-2 A Look at the Communicative Function of Discourse Intonation in English

Chair IKENO, Osamu (Ehime University)

Speaker IDO, Yoshio

(Professor Emeritus of Ehime University)

At the beginning of his talk, Professor Ido mentioned that he would dedicate this talk to Dr. David Brazil, who inspired and greatly influenced him in his research on English intonation. He then elaborated on a notion of discourse intonation, particularly in terms of how proclaiming and referring tones are determined by the informational status of utterances (i.e., given/new). This was further developed in his detailed discussion of the “loop theory” which seeks to account for how the communicative value of intonation is created by pitch sequences. Lastly, Professor Ido discussed some pedagogical implications of his research. He hypothesized that underuse of referring tones and the resulting rather monotonous pitch are responsible, at least partially, for the rather ‘choppy’ speech of some Japanese learners of English. Professor Ido concluded this talk by emphasizing the importance of further research on the communicative value of discourse intonation in English and its applications to SL pedagogy.

Professor Ido’s talk was a summary of the research that he had conducted to date, and included important insights into the improvement of English teaching in Japan, (particularly oral communication classes). In addition to his insightful and stimulating talk, we would also like to express our sincere gratitude to Professor Ido for his great contribution to the development of Chugoku-Shikoku Chapter of JACET as its chair for many years.

(Summarized by IKENO, Osamu. Ehime University)

1-3 The Role of Native-English Speaking Teachers in the Korean EFL Education System

司会 多田 稔 (大谷大)

講師 Dr. Lee, Hwa-ja

(Sunchon National University, KATE)

In international society, English is recognized as a dominant language for various reasons. Now, it has become the primary foreign language in schools in Korea. In this context English trends in Korea have preferred an all-English class to a bilingual one, being escalated by the government policy of ‘globalization,’ which resulted in an influx of English native speakers to classes ranging from private to public educational institutions. Some universities announced all General English courses should be lectured in English only and extended the English-only lecture to content courses. In such a circumstance, educational administrators as well as students are often misdirected to believe that native speakers are a panacea and the only resource of improving their English proficiency. It is true that their English skills, especially oral skills, will be much developed when they are immersed in English speaking environments. Yet there should be some research done to empirically verify the efficiency of native-speakers in helping students to learn English along with such a drastic change as is seen in Korea now. The purpose of this study was to improve the educational quality of the communicative General English Program of her University by conducting development-oriented evaluation while the program was in progress. After the formative evaluation was carried out, she got two major findings from the data analysis: (1) native-English instructors reviewed the program ineffective, particularly for lower groups and reported more troubles and problems with their instruction than Korean EFL teachers and (2) students should have basic understanding of English grammar and vocabulary if they were to benefit maximally from the communicative class by native-English teachers. Responding to the issues raised from these findings, she suggested several appropriate ways based on the updated researches done by herself and tactfully concluded her lecture with a context-oriented adoption of a communicative program: “planners of college General English curriculum should try a judicious blend of inside and outside factors of specific school settings so as to generate a context-sensitive, situationally responsive, and balanced design.”

(Summarized by TADA, Minoru. Otani University)

1-4 「英作文：翻訳と英文の間で」

司 会 國吉丈夫（千葉経済大）
発表者 上田明子（大東文化大）

まとまりのあるパラグラフを書くためには、主題文と支持文という意味上のつながりに加えて、文と文の間の構造上の連結をはっきりさせる必要がある。順序を表す first, second とか、接続詞の使用などはすでに指導する項目として取り上げられているが、文の構造上のつながりには配慮がたりない。構造上のつながりを作るとは、それぞれの文の主語を使って言及する項目を、可能なかぎり同一にするという簡単な手段から、Halliday などによる theme-rheme の別を利用して、主語（unmarked theme）の統一に加えて、いくつかの文の marked themes の間に意味上のつながりや対比などを作って、これを利用する方法もある。

和文英訳（『英語青年』）欄を Thomas Mader 氏（専門分野 rhetoric）と協力して何回か担当した結果、上田・Mader 訳の間にいくつかの特徴的な差異があることに気づいた。この発見は、上記の項目に加えて、英文の構成を明快にする助けとなると考えて例示し提案する。第一は、同じ文の中でも、他に理由がない限り、同一の主語を使い、かつ、動作主を主語とすること。次に、修飾構造で left-branching となる日本語の構造順序は、従属節と主節の位置関係にも影響していて、従属節＋主節の順の配置が多い。譲歩などの従属節を文章の切り出しに用いる傾向もこれを助長している。英文に翻訳する、あるいは英文を書く場合には、この傾向を無意識に転用することなく、重要なこと、すなわち主題を表す節を文中のどこに置くべきかにも注意する必要がある。

これらの配慮は、英語らしい文を書くためばかりでなくどの言語においても「わかりやすさ」をますために資するものであり、教育面に取り入れる必要があると考え提案する。（文責：國吉丈夫・千葉経済大）

1-5 21世紀に日本の英語教育は生き残れるか

司 会 西村嘉太郎（東日本国際大）
講演者 横田 勉（桜花学園大）

教科としての英語教育ではなく、21世紀の多様化した社会での、個人のレベルで機能しうる英語教育を構築するためには、その背景基盤に内在する要因の分析しか生き残り戦略の方策はない。

1. 教育制度的背景とその要因

学校教育制度は、その機能を縮小化し、特化しつつあり、教育内容、教員養成はじめ、英語教育の目的を歪め、学校教育の空洞化を招き、学校は単なる認定機関となる恐れなしとしない。教員の統一資格試験の提案もされた。

2. 社会的背景とその要因

ここに含まれる要因は情報化社会、個人志向社会、生

涯学習社会であり、これらの脱制度性を有する条件が、学校における英語学習離れを加速させるであろう。たしかに画一的システムの中での英語教育は意味が無い。

3. 文化的背景とその要因

多文化主義、国際主義、異文化主義が考えられるが、日本の社会はこの渦の中で、その英語教育には一種の国際水準が求められる。その場合教師個人の力量の違いをどうしたらよいか課題である。

4. 専門集团的背景とその要因

21世紀において、英語教育研究の専門集団（学会、研究会など）はその存在意義を厳しく社会から問われることであろう。

英語教育の再構築が絶対の条件であり、教師はそれにむかって自己再生方策を図らねばならない。

（文責：西村嘉太郎・東日本国際大学）

【私の授業】

1. ハイライト効果を使ったビデオ教材によるLL教室でのスピード・リーディングとリスニングの授業 （Reading and Listening in a Language Lab — Using Highlighted Text on Video for Speed Reading Practice）

発表者：立教大学英語教育研究室 リーディング・アンド・リスニング新教材開発グループ

鳥飼慎一郎
高山 一郎
実松 克義

スピード・リーディングとリスニングの授業にいくつかの新しい試みを盛り込まれていた。この授業の第一の目標は、ある程度の長さのパスセージを速読し（1分間に120語前後を当面の目標とする）、その要旨の把握と概要の理解としているが、さらに読んだり聞いたりした事柄を英語でまとめたり、そのテーマに関する自分の意見を英語で書いたり、口頭で発表したりできることなどを加えた総合的な授業の紹介であった。

新しい試みの一つは、速読にLL教室でのビデオ教材を使うことと、その指導法にある。ビデオ画面に、各パラグラフが時間を決めて（能力別に4種類の速さが設定されている）次々と映し出されて行く。学生はその映像を見ながら速読を続けるのだが、その際に教師は速読の理論やスキルを解説するだけでなく、速読時での眼球運動（視点、視野、視点の移動）などを直接指導できるように、画面を工夫して、眼球運動と同様の速さで一気読みすべき範囲、注視すべき単語、視点の移動先などを明示している。また、速読の速さは個人差があるので、このビデオ教材には同じ内容の教材が4種類の速さ（1分間に120語、100語、80語、66語）で編集されたものが用意されていて、学生は自分の能力に応じてその中の一つを選択できるようになっている。

もう一つの試みは、リスニング部門にある。ビデオ教材の特徴を生かして、話者の映像を映し出し、音声以外のいわゆるノンバーバル・コミュニケーションによる様々な情報をメッセージ理解に役立てられるよう工夫した点にある。より実践的で総合的なリスニング能力を育成しようとの試みが見られた。

(文責：杉本豊久・成城大)

2. Utilization of the Work of Reading and Writing for Oral Communication

YAMAZATO, Keiko
(Okinawa Christian Junior College)

The purpose of this class (English Reading IV) is to help students to be good participants in oral communication, using the work of reading and writing, which means to synthesize three language skills: reading, writing and speaking. Students are given the following homework: 1) to read the assigned material (This class is "English Reading IV", and students have to read as their primary duty. The core textbook is *Great People of Our Time* published by Kinseido, which is easy enough for them to read by themselves.) 2) to write his/her personal impressions of what he/she has read. (They can write any reaction to the material as their personal impression which is different from a summary of the story. The reaction or personal impression helps them discuss with the other students in their group. They has to submit their writing.) In the class, each student belongs to one of six groups and they discuss what they have read, referring to what they have written.

It is important how to conduct each class. Among students, for example, there are some students who studied abroad more than two years and have better ability in speaking. There are also a few students from South America. They are also studying English as a foreign language as well as Japanese students. The next two groups are chosen for this Video to show their class work. 1) one group with 4 ordinary Japanese students and 1 from South America, where the instructor works as a facilitator of discussion, and 2) one group with 1 returnee and the instructor, where the instructor encourages the student to speak as much as possible.

The two groups on the video show that junior college students can discuss that much when stimulated by reading material and writing personal impressions of what they have read. That is, the work of reading and writing surely helps students in their oral communication.

(SUGIMOTO, Toyohisa. Seijo University)

3. 『国境のない教室』を目指して —インターネットで磨くライティング能力—

発表者：西堀ゆり（北海道大）
協力：北海道大情報メディア教育
研究総合センター
岡部成玄
山本裕一
北海道大工学部
黒崎大輔
堀川紀考

情報メディアの活用を大学レベルのライティングに導入し、自己発信能力を高めるための教授法の可能性を広めた点が新鮮であった。大学レベルの学習者の理解度と知的好奇心を考慮し、単に機械的な反復訓練に留まらず、高度な自己発信能力の育成を目標に掲げる授業であり、それは社会的にも高度な情報化が進み、マルチメディアを媒体とした発信能力の育成が望まれている昨今、ある意味で時代の先端をゆく授業といえよう。

具体的には、学期の前半で、徹底したパラグラフ・ライティング（簡潔で説得力のある論旨を一つのパラグラフにまとめる）の訓練をした後で、1) メール・フレンド（手紙文形式の自己紹介メール交換）、2) 大学紹介英文ホームページ（campus information: maps & facilities）、3) ヴァーチャル・ホームステイ（海外の大学のホームページでの情報収集や自筆署名入りのフォーマルな手紙文の作成）、4) チャット de デイベート（Chat 'n' Debate）（チャットルームを利用したパソコン画面でのグループ・ディスカッション）、5) ホームページ・ギャラリー（学生個人の英文ホームページの作成と公開）などの言語活動を行う。特に「チャット de デイベート」では、台湾や韓国の学生がリアルタイムで参加し、日本の学生との間でグループ・ディスカッションを試みている。これは英語という共通言語を介して、サイバースペースにまさに『国境のない教室』を作り、語り合い、理解し合い、助け合う力を培う、と同時にアジアを舞台に時差のない教室を作り、学生たちに異文化理解の実体験をさせることができる。

授業内容の充実はもとより、西堀氏が苦心して作成したビデオの完成度が極めて高く、特に授業に望む学生たちの生き生きとした反応が鮮明に紹介され、会場を圧倒した。
(文責：杉本豊久・成城大)

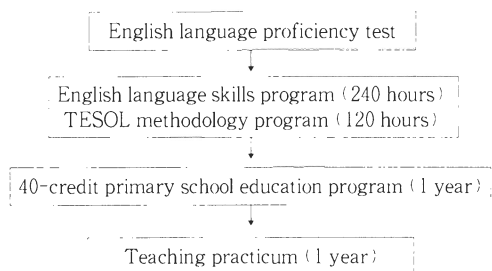
【基調講演】

Evaluation of the MOE Primary School English Teacher Training Program in Taiwan

Yu-hwei Shih
National Taiwan Normal University

Over the past decade, it has been a common practice for children in Taiwan to attend English classes at private language institutes. In response to the general public's urge to start English education earlier, the Ministry of Education (MOE) of Taiwan launched a new policy of incorporating English education into the primary school curriculum, starting from the fifth and sixth grades in 2001.

In implementing the new language policy, the first task of the MOE is to recruit and prepare enough qualified English teachers by 2001 to ensure quality teaching. To meet this urgent need, the MOE established an unprecedented large-scale, nation-wide Primary School English Teacher Training Program (PSETTP). The PSETTP is composed of four components organized in the following sequence:



The English language proficiency test was held in March 1999. It consisted of two parts: a written test and an oral test. Only those who reached a high score, equivalent to TOFEL 600+ and S-2+ oral proficiency, were admitted to the teacher training program. The exam was very competitive. Out of 45,495 applicants, only 3536 were accepted for the PSETTP.

An evaluation of the PSETTP was conducted in the spring of 2000, based on a questionnaire survey, on-site visits to training institutions, and interviews with program directors, teachers and trainees. The results of evaluation are summarized below:

(1) The majority of trainees gave positive feedback on the program, were satisfied with the overall program design, and regarded most of the courses as useful and practical, but felt the content of some courses overlapped.

(2) The TESOL methodology program was quite useful, but the 120 hours of training were too few for the trainees to

process and synthesize what they were learning. By contrast, some regarded the 240-hour language skills program too long because most trainees already had rather good command of English.

(3) Some trainers were not well enough qualified. They were not familiar with teaching techniques for young learners. They emphasized theory too much and gave little attention to practical teaching techniques and strategies.

(4) There were quite a few complaints about the organizational and administrative problems of the programs, including planning the program too hastily, being unable to assign the trainees to their requested training institutions or provide them the desirable course schedule. Worst of all, many trainees were not clear about the whole program, such as the time length each sub-program required. These complaints could well have been avoided if there had been detailed explanations about the program at the beginning and if more channels of communication had been opened up between the MOE and the trainees.

In spite of the shortcomings, the general public has given positive support to the MOE Program because it has prepared a great number of well-trained and highly proficient primary school English teachers

It is hoped that the results of this program evaluation will provide insight for the planning of English teacher training programs in the future.

【小講演】

2-1 Teaching Pronunciation to Japanese Speakers of English — a phonetician's view —

Chair SUZUKI, Hiroshi (Chubu University)
Speaker MATSUNO, Kazuhiko
(Nagoya University of Foreign Studies)

As Japan moves towards internationalization, phoneticians should give their students advice and instruction on how to become better speakers of English, realizing that merely conducting pronunciation training does not produce good speakers. This was the basis of Prof. Matsuno's talk. He further said that speaking is not just pronunciation and that students practice time can usefully be spent on other areas which are more open to ready improvement such as vocabulary, grammar, imagination, and attitudes toward communication.

One of the ways to produce good speakers, the professor argued, is to reintroduce the good old method of reading the printed text aloud, because students can at least utter English sounds and have something to say. The role of the phonetician is to listen to each student as a devoted listener, without looking at the text, and respond to his or her performance. The teacher receives the student's

performance as if his reading is the only medium available to convey the content of the text. While the student is reading, the other students are asked to listen to him or her, trying to understand the content without looking at the printed pages. The lecturer said this worked very well in more than twenty years of teaching at Osaka University and then later, at the University of Tokyo, which he left just this spring.

Prof. Matsuno then explained his method, telling us his actual teaching procedure in a class of 3rd and 4th year students at the University of Tokyo. He asked each of the 10 to 15 students to choose an article from magazines, newspapers, or pages from on-line news services on the Internet, and to prepare to explain the story to the class. The student with the story would read out the article. All the students would have copies of the article, but Prof. Matsuno would just listen to the student read aloud the article without looking at the text. He would try to follow the story and if he had any difficulty, he would ask the student to read again, until his difficulty was resolved.

Another type of training the professor has been conducting involves dictation using recorded material. The method, he said, is a sure way to change students attitude toward the learning of English. Providing an appropriate analysis of student errors and mistakes, and with explanation of and possibly a solution for them, they learn to approach spoken English with a positive attitude.

(Summarized by SUZUKI, Hiroshi. Chubu University)

2-2 話す英語の教え方

司会 名本 幹雄 (筑紫女学園大)
講演 福田 昇八 (九州ルーテル学院大)

英語教育は中学から大学まで一貫したものであるが、中学における英語教育が基本的なものであり最も重要である。したがって現行の中学における英語教育の改善が必要であるというのが講演の趣旨である。それには教える側が発想の転換をしなければならない。現行の教科書は会話中心のような姿をしているが文法項目別に文章が選ばれていて生きた会話でなく、文法習得用会話である。これは、外国語は、段階的に、文法的に教えればよいという間違った思いこみによると指摘する。これと並んで音声軽視、文字重視が諸悪の根源とも言う。この教育方法は文字第一方式である。この教育方法を音声第一方式に変更することを提唱された。つまりまず聞くこと、話すことから始める。ジスイズアベン、アイラブユーなら誰でも言える。文字は後回しでよい、まずは、言えれば良いという方針にすれば、一人残らず英語が話せるようになり、その結果、綴り字、文法も楽に習得するようになるという考え方である。これは外国人が日本語を学ぶ際の方式である。まず音声から学び始め文字へと移行する。またこの赤ちゃん方式が最高の英語習得法であることを終戦直後に平川唯一氏が示された。福田氏のご自身

の経験からこの方式が優れていることを主張された。

少子化、大学教育のユニバーサル化に伴い大学の危機、外国語教育の危機が叫ばれる今日、福田氏の英語教育30年の経験に基づく講演は、聴衆に深い感銘をあたえた。
(文責：名本 幹雄・筑紫女学園大)

2-3 英語の学習、指導、研究 一個人的体験より一

司会 菅原光穂 (岐阜女子大)
講演者 丹下省吾 (名古屋外国語大)

氏は第二次大戦下、一年半も教室では学べない中学時代を過ごしたが、英語については徹底した問答や暗誦主体の入門教育を受けた。後年それがご自身の中学教諭初期の指導法の雛型となった。ミシガン大学でFriesやLadoから言語学と教授法の手ほどきを受ける。苦労もあったが、これが氏の研究生生活の端緒となる。

60年代以降は、大学で教鞭をとる傍ら地域の研究会をおこして新しい言語理論の研究をおこなう。JACETとの関わりは創立10周年の記念大会以来で、Language Transferを考えるようになったのは70年代半ばの在英研究中のことであった。

以下は、氏が言及された言語理論への思いである。

言語理論の変遷や心理学・社会学的視点の導入などにより、第二言語習得論は急速に拡大深化し、一方、'Language Transfer' の概念も包括的になった。Transrerを無視してSLAは語れないと言われるまでになっているが、その実態の究明にはまだ課題が多い。実証的研究が望まれる。さらに、この応用言語学研究が教室の指導にどのように適用できるのか、ということになると、にわかに即効性は期待できない。

明らかに母語に起因するとみなされる学習上の誤りがあとを絶たない現状に対して、可能な一つの手段は、初期の対照分析に立ち返ることである。もちろんすべてを旧に復すというわけではないが、原点の言語構造の対比に未だ開拓できる余地は多いと思われる。殊に、当初注目されていた文法の部門よりも、語彙・表現の対照分析をさらに進める必要があるのではないか。それも、日本語・日本文化という目を通した研究である。

(文責：菅原光穂・岐阜女子大)

2-4 ひとすじの爪跡

司会 大谷 泰照 (滋賀県立大)
講演者 澤村 文雄 (園田学園女子大)

澤村文雄教授は、県立高校17年、県立教育研修所6年、県教育委員会2年、そして園田学園女子大学に22年勤務され、2000年の春、めでたく定年ご退職になった。文字どおり20世紀後半の半世紀をそっくり、教育者、研究者として生きてこられたことになる。

澤村教授は自らを「研究者」とはおっしゃらず、ご講

演でも、もっぱら「英語教師」としての半世紀を回顧されたが、それはそのまま、わが国の戦後の英語教育史をうかがう趣きがあった。

ご自身の教師としての「原点」もご披露いただいたが、教職につかれたばかりの頃に書かれた論文「若い世代に望む」(皇太子結婚記念奨学論文第1席入選)のお話は、新しい世紀に生きようとする教師たちにとっても、なお新鮮な意味をもち続けるものであった。

英語嫌いをつくらない英語教育や日本語・日本文化に着目した英語教育は、澤村教授の半世紀を通じての重要な研究・教育課題であり続けたが、これはまた、わが国の英語教育界のいわば永遠の教育課題であるといえるかもしれない。

演題は、佐々木邦の小説『地に爪跡を残すもの』に感激し、触発されてのことであるが、戦後の英語教育界にたく確かな爪跡を残された澤村教授の豊かな経験に裏打ちされたさわやかなご講演であった。

(文責：大谷 泰照・滋賀県立大)

2-5 「英和辞典とメタファー」

司会 畑中孝實 (東北学院大)
講師 加藤和男 (元・岩手医科大)

本講演ではレジュメでも述べたように、従来の英和辞典における慣用的なメタファーの扱いについて、英英辞典の記述に追従するだけでなく、英英辞典が見落としている情報を英和辞典が率先して記載・発信する必要があることを強調した。

英単語の、慣用化された日常的な転義現象はそれがあまりに日常的であるため、英語圏の辞書編集者が見落としていることもある。そして、そのような転義現象には外国人学習者のほうが敏感であることも珍しくないのである。

tin cup に対して「(こじきなどが)物乞いする時に使う缶」という語義を与えたのは、講演者が知るかぎり「新ランダムハウス英和大辞典・第2版」(1994)が最初であるが、その後、Random House Compact Unabridged Dictionary, Special Second Edition (1996)がその Addenda Section に採録している。(1999年出版のある英和辞典の第2版には、初版にはなかった、この語義が採録された。)

tin cup のように、英和辞典に先に採録された情報が後に英英辞典に独立に採録された例として apples and oranges がある。「新ランダムハウス英和大辞典・第2版」(1994)はこの連語に対して「比較できないもの」という語義を与えたが、その後、The New Oxford Dictionary of English (1998)が“N. Amori. (of two people or things) irreconcilably or fundamentally different”という語義を与えている。

「(新生児や老人の顔の)しわ、あるいは、しわだらけの顔」の意味の prune という語の用法は非常に一般的なもので、日本の皮膚科医の常識であるといわれるが、現在この語義を採録している辞書は「新ランダムハウス

英和大辞典・第2版」(1994)しかないように思われる。Dictionary of American Slang, Third Edition (1995)がこの語に対して“medical by 1980s Dehydrated nursing home patient”という語義を新たに示しているが、英和辞典としてはこのスラング辞典の新版の語義よりも(日本語の「梅干し」に近い)「(新生児や老人の顔の)しわ、あるいは、しわだらけの顔」という一般的な転義を優先すべきであろう。なぜなら、この米語スラング辞典の新語義は「しわ」という一般的な語義の特殊化にすぎないからである。

このほか、講演では、辞書に未採録のメタファー shoe leather の用法を紹介し、human ballast という表現の解釈と(紙の)辞書の情報の限界についても論じた。

(文責：畑中孝實・東北学院大)

2-6 Extensive Reading: Does It Help Our Students Read More Fluently?

Chair : SUZUKI, Chizuko
(Nagasaki Junshin J. College)
Speaker : Dr. RENANDYA, Willy
(RELC, Singapore)

This mini-lecture was so much informative, well-prepared and convincing as to be equivalent to a one-semester course of TESOL, accompanied with plenty of useful material in the handout/presentation distributed and projected in the conference site.

The lecturer kindly provided us with the information source concerning the topic of his lecture as follows:

<http://www.kyoto-su.ac.jp/information/et/>; by the way, the website of RELC is <http://www.relc.org.sg>, which might be also informative for related fields.

The lecture was composed of reviewing of preceding works on ER (Extensive Reading), defining ER, characterizing ER vs. IR (Intensive Reading), featuring benefits of ER, and introducing tips for practicing a good ER program.

A good ER program is to be implemented by appropriate material, enjoyable post-reading activities, and good role model — teacher's attitude. And the post-reading activities are to be facilitated with useful reinforcement, sense of progress, and output hypothesis. So, some production tasks are required to be properly assigned as post-reading activities to carry out the program in an effective way.

The reason why the audience were so strongly impressed might be that every part of his lecture was supported and documented by practical methods and research results, while most of us had already been informed about ER by know ledge.

(Summarized by SUZUKI, Chizuko, Nagasaki Junshin J. College)

2-7 TESOL — Teachers Endlessly Seeking Opportunities for Learning?

PIKERING, George (IATEFL Representative)

George Pikerling is Treasurer of IATEFL and Co-ordinator of the IATEFL ELT Management SIG.

In his workshop, he emphasized the importance of Continuing Professional Development (CPD) in order to survive in the language profession within the current changing context. He also discussed the expanding role of teacher as facilitator, consoler, negotiator, partner, coach, diagnostician, mentor, monkey manager and among others. Then he defined CPD as the systematic updating and enhancement of skills/knowledge, as well as the attitude and process of being a lifelong learner. The audience from Korea, Canada, America, and Japan developed their understanding through asking questions and discussing both the individual and institutional benefits of CPD. They also discussed how a teacher could plan his/her own CPD as a language teacher.

Lastly, the audience shared their ideas on the ways to develop themselves.

Pikerling concluded the workshop, proposing fifty-seven ways to develop ourselves. Among them are 1) video ourselves in action, 2) peer observation, 3) team teaching, 4) give a seminar, 5) use guidance from a mentor, and 6) modelling. He mentioned the advantages of mentoring others and the importance of modelling. To be a better teacher we must mentor others and have ideal models. Teachers should know their own learning style and set goals and continue to learn through their lives. The CPD-related workshop was rare among JACET conferences. This workshop made all the audience aware of the importance of CPD.

(Summarized by UENO, Yukie. Hokkai Gakuen University)

【シンポジウム】

2-1 ESP コースデザイン：理論と実践

司会・提案者 野口ジュディー

(武庫川女子大)

提案者 深山晶子 (大阪工業大)

ESPに大事な要素の一つ Learner Autonomy (学習者の自立)を実現するには「コースデザイン」においては(1)学習者のニーズ、(2)教育現場の事情、(3)担当教師(provider vs. facilitator)を考慮しなければならない。

「教材開発」においては、オーセンティックな素材を使い、素材のPAIL(目的、受け手、情報、言語特徴)が明らかになるように作成するのが理想である。例としてサンフランシスコ地震で建物の危険度を示す告示をどのようにESP教材として料理するかが紹介された。

「教室内活動」を活発にするには、グループワークが最適の形態である。有効なグループワークは以下の要素：積極的相互依存、個人責任義務、グループの結合力、グループ間の競争、接近度、良いリーダーの存在、を含んでいなければならない。発表では、これらの要素を含む、具体的グループワークのやり方と採点法が示された。

「課外活動」に関しては、学習者の自立を促す方法が、3つのキーワードに添って紹介された：3C's、DDL、COHP。3C'sはcorpus, concordance, collocationで、ESPの場合それぞれの専門分野で表現が異なるのでcustomized corpusを学習者と共に構築し、concordance collocationで、得た情報を分析する方法が示された。例としてバーミンガム大学のJohnsのdata-driven learningがある。COHPはcollect(例文を集める)、observe(それを観察する)、hypothesize(その例文の言語特徴について推察する)、practice(実践する)。このプロセスで学習者は言語特徴に敏感になり、将来実社会で言語に対する問題が起きた時に対処できるようになる。

(文責：野口ジュディー・武庫川女子大)

2-2 ニーズ分析の評価と成績評価

司会・提案者 古谷千里 (語学教育コンテンツ
研究開発ディレクター)

提案者 新田香織 (近畿大)
神前陽子 (武庫川女子大)

ESPでは、Learner Autonomyと並んでNeeds Analysisが大事な要素であるとされている。

「データ収集」は3つの領域で行う：

- (1) デイスクラスコミュニティのニーズ、
- (2) 教師および大学のニーズ、
- (3) 学習者のニーズ (目標状況分析と現状分析)。

実際にアンケート調査をする場合、その項目には言語能力、情意的要因(不安とモチベーション)、学習スタイルと学習ストラテジーが含まれていなければならない。また、「コース評価」は、ニーズ分析には欠かせない部分で、コース途中とコース終了後に行い、よりよいコースを目指すのに参考にする。評価方法としては、質的評価と量的評価がある。

「成績評価」では従来の教師中心のやり方と異なった学生間相互評価が紹介された。これはグループワークの一環として行い、グループ内の協力を促すだけでなく、学習意欲を高めて教育効果も上げることができる。事例として、ESP教材を勉強したあと、その話題に関連したものについて学生がグループでプレゼンテーションをし、クラスルーム内で、その発表に関して相互評価させる方法が紹介された。この方法は学生に建設的批評のやりかたを体験させるだけでなく、発表者と発表を聞く者の双方にはっきりした目的があるのでモチベーションを高める一助にもなる。大切なポイントは、課題の到達目標を学生にはっきりと掴ませることと評価基準が明確に示

されることである。このようなクラス活動は学習者の自立につながる。

(文責：古谷千里・語学教育コンテンツ研究開発ディレクター)

2-3 英語教育の成功要因ーバイリンガル教育の観点からー

司会・提案者 岡 秀夫 (東京大)
提案者 山下 栄 (鶴見大)
湯本和子 (神奈川県立外語短大)
鈴木広子 (東海大)
臼井芳子 (国際基督教大)

バイリンガリズム研究会では、これまで日本のバイリンガル教育について調査をしてきた。今回のシンポジウムでは、広義のバイリンガル教育に成功していると考えられる4つのプログラムに焦点を合わせ、プログラムのもつ成功への貢献要因を明らかにすることを旨とした。

まず、国際基督教大学では、1年次に集中的な英語教育がプログラム化され、さらに英語でおこなう content based の講義が大学全体のカリキュラムの中に組み込まれているのが大きな特徴である。参加型の授業、論文指導重視、多読を通して、英語力の伸びが著しいばかりでなく、academic skills の習得、critical thinking 力の育成に貢献する

都立国際高校では、英語の授業が多展開習熟度別授業という形でレベル別に、少人数で行われる。生徒は明るく活発で、異文化に対する関心が高く、外国語学習への動機づけも高い。帰国生と帰国人生徒の存在が授業や行事を通して、学校全体の国際化に貢献している

慶応義塾湘南中等部では、帰国生の枠が他の中学よりも広く、入学後も帰国生の英語力の維持に効果を上げている。教育目標が高く、個々の生徒へ配慮が払われ、教材が多様で、教師の資質が高いというような特色が認められた。帰国生と一般生の共働 (collaboration) がお互いを刺激し、それぞれのプラスになっている。

横浜山中中華学校では、日本語を母語とするものが過半数をしめるが、授業では中国語の割合が8～6割をしめる。中国語、日本語のテストを実施したところ、2つの言語とも習得度が高いという結果がえられた。こどもたちは、それぞれの言語能力において年齢相当の力を伸ばしているばかりでなく、2つの文化を享受し、バイカルチュラルとして成長していく。

発表の後、会場から各学校の教材や評価について質問や意見が出された。それらの議論を通じて、成功要因への理解が深められた。21世紀に向けて、成功要因の効果的な組み合わせが促進されれば幸いである。

(文責：岡 秀夫・東京大)
河野 円・星薬科大)

2-4 教育カリキュラム全般に渡るクリティカル・シンキングの役割と可能性

発題・司会者 竹前 文夫 (亜細亜大)
発題者 松田 憲 (亜細亜大)
岡田 礼子 (東海大短大)
木村みどり (青山学院大)

まず、司会がCritical Thinking (CT)を日本に導入する場合、英語という科目にこだわらず、他科目とのカリキュラムの連携をも考えるべきであるとの提案をして、高知大学、富山大学、桜美林大学などでの「日本語教育」の実例を紹介した。

次に松田が、亜細亜大学の教員と大学生を対象にしたCTに関するアンケート調査結果を分析し、授業中、留学生のほうが日本人より積極的にCTを使っており、留学生と一緒に授業が日本人学生のCT使用を促進する効果があると報告した。また、使用言語 (英語と日本語) の違いがCTに及ぼす影響や授業でのCT使用に関する教員と学生の認識差についても報告し、日本人を対象にしたCTテストの必要性を説いた。

岡田はCTの力は知識を得るだけでは養成されず、得た知識を理解し応用する活動によって育成される (Bloom, 1956) という論から、短大生200余名を調査し、高校での英語学習ではCTする活動は殆ど行われていないことを知った。そこで、短大英文読解授業でInternet上の情報を使い、自力で情報を読み、考える活動をさせ、CT力の養成を図り、学生の上達が見られたと報告した

木村は「CTは学校で指導すべき」という欧米、カナダの教育例を文献より紹介し、日本におけるCT授業の例として、Debate教育をあげた。英語力、思考力、意欲の三つの角度から、高校、短大、大学生より収集したデータに基づき、その成果を発表した。Debateは正しい情報に基づいて、多角的に物事を考えさせ、思考の幅を広げる点で、CT Skillを向上させる。学習内容を定着化させる効果があることを力説した。

(文責：竹前文夫・亜細亜大)

【ワークショップ報告】

1. 平和の文化を沖縄から

司会・提案 浅川 和也 (東海学園大)
提案 森山 淑夫 (千葉県立磯部高)
室井美稚子 (長野県立須坂高)

2000年は国連が定めた平和の文化国際年であり、今後、世界の子どものための平和と非暴力の文化の10年をすすめるとしている。国際理解の一環として、非暴力と平和の文化の追求のために、大会の場が沖縄であることを踏まえ、沖縄について学ぶ教材のあり方をワークショップとして検討した。

高等学校において沖縄への修学旅行が増えていることから室井による“OKINAWA” (三友社出版) は自然、文

化、歴史を学ぶのによい教材である。沖縄を取りあげることが多文化理解の端緒となり得る。また、沖縄を英語で学び世界に発信することは、平和の意味を世界の人々と考える契機ともなるとも考える。

森山の事例は高校教師らが、ボランティアとしてドキュメンタリー映画の英語版制作に協力したものである。記録映画「教えられなかった戦争・沖縄編—阿波根昌鴻・伊江島のたたかい」よりラストシーンも視聴した。ネーネズの歌をバックに農民や基地での様子が映し出された。英語版（ビデオ頒布可：kasa@sainet.or.jp）によりこの映画のメッセージを世界の草の根の人々に伝えることができるのである。

沖縄からの参加者は、ぜひこうした教材を沖縄でも普及したいと述べられた。総合的学習の時間での取り組みとして地域に学ぶことが大切だ、という意見もあった。英語をとおして、何を学び、発信するか考えていきたいと思う。（文責：浅川 和也・東海学園大）

2. 外国語効果

司会・提案者 大津由紀雄（慶應義塾大）
提案者 高野陽太郎（東京大）
柳瀬 陽介（広島大）

認知心理学者の高野陽太郎は、「不慣れな外国語を使っている最中は、その外国語を使うのが難しいだけでなく、思考力も一時的に低下するという現象」があると主張し、その現象を「外国語効果 Foreign Language Effect」と呼ぶ。加えて、高野は、外国語効果は外国語使用のむずかしさとは別のものであること、外国語効果による思考の低下の度合いは母語と外国語の類似度により影響を受けること、外国語効果の故に外国語を使っている人の知的能力が過小評価される傾向があることなども主張している。いずれの主張も、英語教育にとって重要な意味を持ちうるものであり、また、その社会的意義も大きい。

今回のワークショップでは、まず、高野が外国語効果とはなにか、そして、それにかかわる主張を裏付ける実験について、丁寧に、わかりやすく説明をした。続いて、英語教育研究者の柳瀬と認知科学者の大津がその順に討論を行った。多くの論点が提出されたが、「思考」ないしは「思考力」の本質にかかわる点が多かった。

参加者、とくに若い参加者が多く、会場の雰囲気は大変盛り上がり、90分という時間的制約の下で充実した活動ができたと自負している。ただ、あと30分の余裕があれば、フロアからの参加も可能であったろうと悔やまれる。（文責：大津由紀雄・慶應義塾大）

3. 英語テキストの国際比較——よい人間関係のためのストラテジー

〈待遇表現研究会〉

司会・提案者 堀 素子（東海学園女子大）
提案者 津田早苗（東海学園大）
村田泰美（名古屋商科大）
村田和代（奈良女子大大学院）

今年の沖縄大会ではこれまでとやや趣向を変えて、Politenessの概念が外国語としての英語テキストにどのように提示されているかに焦点をあてることにした。

このアプローチの基本となったのは、1999年中部支部大会で発表した「Communication Textbooksの検討 — Politenessの視点から」と題する日本の英会話テキストの分析であった。

そこで今回は他の国のテキストの実態を知りたいと思い、われわれの同僚・知人等に依頼して中学1年に相当する諸外国のテキストを集めた。結局アジアでは中国とインドネシア、ヨーロッパではフランスとギリシャのテキストを比較検討することにした。

ワークショップでは、中国を村田和代、インドネシアを村田泰美、フランスを津田早苗、ギリシャを堀素子が担当し、この順で発表した。それぞれのテキストにはその国の特徴が反映されていて、同じ英語のテキストでありながら題材の選び方、会話の運び方、登場人物の扱い方、テキストの編集方法など多くの点で待遇表現上の違いが見られた。

とりわけ会話者個人への関心の度合いにアジアとヨーロッパに大きな差があった。日本と同様、アジア系では人を個人としてよりも役割として扱う傾向があった。また自然な会話の特徴である discourse markers もアジア系にはきわめて少なかった。これはおそらく人間への興味のあり方、相手への配慮の仕方に基本的な違いがあるからであろう。日本人も、英語生得話者と同様な会話方法はとれなくても、彼らの基本的な人間の扱い方、配慮の仕方を知っておく必要はあろう。

（文責：堀 素子・東海学園女子大）

5. Listening for Literary Themes & Values in Traditional & Contemporary Folk/Pop Songs

司会・提案者 LOUCKY, John（西南女学院短大）

Participants were involved in this 90・Workshop, listening to try to catch the words, rhymes and meaning of various songs. After an overview of Literary Themes was presented, songs listened to were categorized using a given framework, based on their literary themes and values. Other literary themes and topics were solicited from participants. Many multicultural folk tales were shared thematically. These were all interwoven with English and international folk song themes.

We used about ten contemporary songs with Cloze Listening Exercises to show and discuss how to help our students develop better "Listening Skills by Using Contemporary Songs and Literary Themes that Value Life." Many universal Literary Themes addressed in modern songs, as well as in traditional folk and contemporary Gospel/Folk songs were addressed. Some of these were universal life changes, challenges, conflicts, and gains and losses such as those of birth and death. In this Workshop we listened to lots of interesting songs and considered how to incorporate language learning into lessons dealing with universal literary and life themes and values, which are often present in the following genres: 1) Poetry, 2) Fiction, 3) Fables, Myths and Legends, and 4) Children's Literature.

Unfortunately none of the equipment loaned to us had remote control, nor was the CD player functioning properly. This made for a technical challenge as so much material was being presented and interwoven quickly. Nevertheless, along with some video background a wide variety of musical styles and topics were presented so that participants could get a taste of how to correlate the teaching of such songs along with their language teaching potential into an interesting course on both World Folk Tales and Songs. World Folk and Children's Literature provide, in Silberstein's (1994:98) insightful observation (Techniques and Resources in Teaching Reading : a window into the way cultures attempt to reproduce themselves through their children... fables seek to capture universal human truths, often placed within a particular cultural perspective. Fables invite cross-cultural comparisons, especially as students work to predict the moral. Poetry provides students with opportunities to focus on all aspects of reading... for a general sense, for detailed understanding, and to evaluate reactions to the text. The precision of poetry highlights the use of syntax and vocabulary. Songs are a window on cultural history. Folksongs attribute their survival to some aspects of universality, while they illuminate particular historical moments. Through music, students encounter the rhythm of language and infer meaning of vocabulary and concepts from [interesting, authentic cross-cultural] context[s].

As we observed in our many-faceted Workshop, students can learn about many good life values and literary themes from well-chosen songs and stories, while at the same time developing their L2 skills in a more relaxed and enjoyable way. Indeed, literature and songs can allow them to practice many aspects of language. In addition, good songs and stories can bring to our language classes social and aesthetic pleasures unattainable from other reading and listening tasks.

< 第3日 11月5日 >

【基調講演】

English Education in Korean Elementary Schools

LEE, Hyo Woong

Dept. of English, Korea Maritime University, Pusan
President, Korea Association of Teachers of English

I. Introduction

As all countries in the world increase political, economic, social, and cultural exchanges among themselves, the importance of knowing English intensifies. People have felt it necessary to start teaching English in elementary schools, and even in kindergartens, to keep abreast of the rapidly changing world. Another reason for teaching English in elementary schools is that people generally acquire a language more easily if they are exposed to an appropriate language learning environment at an early age.

As English is becoming more important as a global language, the Korean government has shown great interest in improving English education. One part of this effort is teaching children English beginning in elementary schools. In 1995, the Korean Ministry of Education passed legislation requiring all elementary schools in Korea to implement an English education program starting with the 3rd grade commencing with the 1997 school year. They were also mandated to add one grade level to the program each year. This has resulted in the inclusion of 3rd to 6th grade in the program this year.

In this presentation, I will first briefly look at the sixth- and seventh-grade elementary school English curricula. Then teachers, textbooks, and teaching materials will be discussed. Finally, I will present an evaluation of Korean elementary school English education, in terms of students, students' parents, teachers, and school administrators.

II. Elementary School Curriculum

The elementary school English curriculum stipulated by the Ministry of Education includes educational goals, contents, basic guidelines on English teaching methodology, and student evaluation.

The overall principles for elementary school English education focus on basic English communicative skills, especially the oral language skills of listening and speaking. In the elementary school English curriculum, the contents of the curriculum consist of language functions and language, which includes topics, language mode, vocabulary, and word limits per sentence, which increase for each grade

level. The six basic guidelines on English teaching methodology were suggested by the Ministry of Education. Student achievement is measured holistically as a way of assessing the overall program effectiveness, not measuring individual student academic success in learning English.

III. Teachers

Prior to the introduction of English in elementary schools, the Korean Ministry of Education provided elementary school teachers who voluntarily signed up for in-service training with the initial 120-hour general English training. An additional 120-hour intensive English training was given to selected teachers.

At present, there are two types of English teachers available in elementary schools in Korea: One type is the general classroom teacher who teaches English in their respective classrooms just as they teach all other subjects. This represents the majority. The other type is English speciality teacher who teaches English only in the general classroom teachers' classrooms instead of that teacher. Starting from the year 2001, English speciality teachers will only teach English in the city of Pusan where I am from.

In English classes, the medium of instruction at present is both English and Korean, depending on the teacher. But starting next year, the third- and fourth-grade English teachers are required to conduct their English classes in the target language only.

IV. Textbooks and Materials

At present, there are 16 different sets of textbooks available on the market nationwide and each school can select its own textbook from among these 16 on the basis of their needs. Although the textbook package for the teacher consists of a student book, a teacher's guide, videos, and audio tapes, most teachers prepare their own materials for activities in the classroom due to the lack of related materials for actual classroom use.

V. Evaluation of the Present English Education

Initiating an English education program at the elementary school level is a challenging task in Korea. Unlike the traditional secondary school English language program, there are still many choices available to program developers because the program is in the very beginning stages. However, making these choices can often become a bewildering process. The successful implementation of English language education in Korean elementary schools may depend on whether or not they make the right choices. In this context, the evaluation of the present English education system in terms of students, teachers, parents and administrators can help language educators to make the right choices to improve the English program by providing them with relevant information.

Biographical Data: Hyo Woong Lee

Hyo Woong Lee received his BA in English Education from Kyungbuk National University in 1969, his MA in Linguistics from the University of Texas at Austin in 1985, and his PhD in English Education from Kyungbuk National University in 1999. He has been president of the Youngnam English Teachers' Association and chairman of the national elementary school English textbook selection committee. He is currently president of the Korea Association of Teachers of English and is mainly interested in language learning motivation and strategies, and listening comprehension.

【全体シンポジウム】

English Education in East Asia for the 21st Century

Chair SUZUKI, Chizuko (Nagasaki Junshin J. College)
Speakers RENANDYA Willy (RELC, Singapore)
KWON, Oryang (Seoul National University)
SHIH, Yu-hwei (National Taiwan Normal University)
KOIKE, Ikuo (Meikai University, JACET President)

The four panelists from Singapore, Korea, Taiwan and Japan reflected upon the trends and situations of university-level English language education in Asia as follows:

Dr. Renandya presented how a series of recent paradigm shifts in ELT is actually practiced in Southeast Asian countries. He pointed out that such paradigm shifts had been incorporated in teaching to some extent but not so much in testing, and suggested to direct our attention to 'more opportunity to use language,' 'motivation,' 'learner autonomy,' and 'authentic assessment procedures.'

Dr. Kwon introduced concrete systems, methods, and state of English education in Korean universities, and prospected its directions for future. He concluded his presentation by announcing his email address: oryang@snu.ac.kr, inviting further interaction from all the participants even after the session.

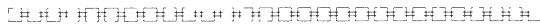
Dr. Shih explained the details of case of Taiwan, focusing on general English education at universities for non-English majors, and proposed several ideas for improving college English education, including 'use of web-based learning projects.'

Dr. Koike reported on what was discussed in the first Asian Conference on Language Education Policy held in August, 1999 at Tokyo. Finally he appealed to the panelists and the audience to support the second Asian Conference on Language Education Policy to be held in the near future.

The presentations were followed by two interesting questions from the floor as follows: 1) What about the state of women in English education in Asia? The answers &

comments from the panelists and floor were all very positive for women. 2) How does the university English education cooperate with lower-level educational institutions like the primary school, besides collaborating with other countries? We approved of the necessity for university education to cooperate with any other institutions in both horizontal and vertical directions: in other words, an orchestrated way or in a multiple direction.

Through these presentations and Qs & As, we shared our common understandings regarding the English language education in Asia. First, we are confronted with challenges of the new development in the world in the new century. Second, it is necessary for us to strive in order to meet these challenges. Finally, it was agreed upon that English educators should endeavor to cooperate with each other by sharing information and ideas and by exploring possibilities of collaborative works in the area of language teaching. (Summarized by SUZUKI, Chizuko, Nagasaki Junshin J. College)



JACET 関係出版物のお知らせ

1. AILA 世界大会の講演・発表集
Selected Papers from AILA '99 Tokyo
お申し込みは現金書留で3000円同封の上、JACET 事務局へ。
2. JACET 文学研究会 編
『[英語教育のための文学] 案内事典』
彩流社、価格3800円。
3. JACET SLA 研究会 編著
『SLA 研究と外国語教育：文献紹介』
リーベル出版、価格1850円。
4. JACET 待遇表現研究会 編
『現代若者ことばの潮流 - 距離をおかない若者たち -』
問い合わせ先、堀 素子氏へEメール
(motokohr@hm.tokaijoshi-u.ac.jp) で。
5. JACET 教育問題研究会 編
『新時代の英語教員養成 - 現状と展望 -』
〔小・中・高の英語教員の現状〕に関する調査報告書
問い合わせはJACET 事務局へ。
6. JACET 言語政策研究会 編
『日本の地方自治体における言語サービスに関する研究 - 「21世紀多言語社会への助走 - 』
問い合わせ先、松原好次氏へEメール
(QZG12153@nifty.ne.jp) で。

講演会のご案内

研究講演委員会企画

日時 3月30日(金) 10:30 - 12:00

場所 東京電機大学7号館4階7401教室
講演者 Tom McArthur 博士
(English Today 編集発行人、元ケベック大学
準教授)
タイトル 'The New World English Dictionaries: Some
Implications for ELT Lexicography in Japan and
Elsewhere'
会費 会員・学生500円、非会員1,000円
問い合わせ先 中尾正史 (fwij4445@mb.infoweb.ne.jp)

Main Articles in This Issue

Foreword (NAMOTO, Mikio)	1
Reports from the JACET Office (KOBAYASHI, Hiromi) ..	3
Reports on the First Day of the Convention	4
Reports on the Second Day of the Convention	12
Reports on the Third Day of the Convention	18
Announcements from JACET Study Group	20

編集後記

初めて沖縄で開催されました第39回全国大会は、延べ参加者が1000名を超え盛会となりました。これはひとえに九州沖縄支部の諸先生がたのご尽力の賜わりです。また、大会中に沖縄の伝統文化や普天間基地の問題に触れることもできましたことに厚くお礼を申し上げます。併せて、会員皆様が大会の運営にご協力くださいましたことにも感謝いたします。来年度は、北海道の藤女子大学にて開催されます、よろしく願いいたします。

この大会特集号は、シンポジウムやワークショップ等で司会をなされました先生方に主としてお願いいたしました。例年とは違って、推薦入学試験やAO入学試験でご多忙なところ、ご協力いただき、誠にありがとうございました。

[芝垣茂 : 東海大]
[久村研 : 調布学園短大]
[中尾正史 : 桐朋学園大短大部]

2000年12月30日発行©

発行者 大学英語教育学会 (JACET)
代表者 小池生夫
発行所 162-0831 東京都新宿区横寺町55
電話 (03) 3268-9686
FAX (03) 3268-9695
E-mail: jacet@zb3.so-net.ne.jp
http://www.jacet.org/
印刷所 228-0021 座間市緑ヶ丘3-46-12
有限会社 タナカ企画
電話 (046) 251-5775